

きざぶのさと

NO.48
月刊

第三編 寺院誌
昭和七年六月一日 発行 八非(意品)
発行所 岡山県都窪郡吉備町東町一五 宇垣方
吉備 靚老協会

○清水山松林寺 (その三)

△天満宮 祭神は菅原道真を祀る。
菅原道真は、その遠祖は野見宿禰にして、菅原是善の三男として養和二年(八四五)に生れた。道真は天性謙讓の人にして、右史に精通レ勅命によつて類聚國史其の他の著書がある。平安朝中期の高名な学者である。
寛平年間宇多天皇に仕へ、藏人頭(くらゐののみみ)に任ぜられ、後ち累進して權大細言の要駁についた。一儒學者の家柄で、この榮譽を得たことは朝野の人々を驚かした。(くらゐのみみという役は、天皇に近侍して機密を告げたりを司る役所頭であつて、天皇の上奏の命令をとり次ぎ、また殿上人を指揮監督する所と、大きな権力を持つてゐる)。これは天皇が藤原氏の專横を喜ばず、叙かにこれを知せられたのである。元來藤原氏は皇室の外戚にして、藤原氏以後代々朝議に参預レ特に六代後宇多天皇の御時、藤原氏に用ひられて左大臣となり、その子順子が仁明天皇の右となつてから、益々權威を振ひ、冬嗣り次子、良房は天安元年に大政大臣に進み、その女の明子は文徳天皇の右となり、第四子は生れた清和天皇が僅かに九歳で位に上つたので良房は攝政になつた。天皇は御年廿七歳で精神病のため皇位を退いて、十歳になる陽成天皇に譲られた。時に良房の孫にあたる基経が、良房の養子になつて右大臣、右近衛大将の職を兼ねて陽成天皇の攝政を拝した。天皇の母君は基経の妹、高子である。基経は天皇の十七歳で位を廢レ、文徳天皇の弟の時康親王を迎へた。これが光孝天皇である。天皇は向ひなく病に遊ばされたので、臣下として源氏の姓を賜つてゐる定省親王をたてた。これが宇多天皇と号すのである。基経は攝政關白となり重要な官職はすべて藤原氏一門でなければ就

任は出来ないと、有様であつたから、藤原氏の專横はその極限に達したのである。そこで宇多天皇は基経の死後、親政政治をとり、攝政關白を排して萬機を決裁せられたので、母にこれを寛平の治と云うのである。
間もなく天皇は一儒者の出身の菅原道真を登用して重要な地位に上つたのである。道真は藤原氏のような野心は更になかつたが、その女を皇子育ち親三の妃とし、また一女は宇多天皇の女御になすなど、大いに寵幸を得て、自然に大権に参與するようになった。次の天皇と醍醐天皇と中御年十三歳の時、基経の子の時平を左大臣に、菅原道真を右大臣に進めたが、時平は二十九歳、道真は五十五歳温厚な人柄であるから、二人の間に溝を生じた。時平は陰謀によつて、道真は天皇を廢レ奉り、その女の婿の斎世親王をたてようとする企がある。と讒養したので、天皇は御年も若くこれに信じて道真を右筆ノ權時(九州)に貶謫して筑紫(九州)に左遷したのである。そしてその子二十三人は各所に配流した。実に延喜元年(九〇二)のことである。

道真の詠める
東風吹かば 匂おこせよ梅の花 主なレとて春な忘れせ
流れ行く 我は水屑となりぬとわ 居ればらみとなりてとどめよ
取長無驚時差改 一葉一落是暮秋 (明石の歌を過ぎての詩)

これは都を落ちて九州に卦かゝる途上の作である。
道真は筑紫に滞ること三年にして、延喜三年病に瀕みて五十九歳で歿した。その間深く謹慎して門を閉じて出ず、日々皇恩の厚きを感拜せられたという。

去年今夜侍清涼 秋思詩篇独断腸 恩賜御衣今在茲 捧持毎日拜餘香
離家三四月 落淚百千行 萬事皆如夢 時々仰被蒼
海ならず ただよふ水の底までも 清き心は月光照さん

我國古代の政治の根本法典になつてゐる天智天皇の七年(六六八)に規制せられた律令(其の前後幾度も改められたが)に基いて設けられた大和朝廷の出来機園で九州地方を管轄した地方官庁である。

官制は推古天皇以下の役人をあつた外、大伴との関係上外敵に備えて防人司(さきもりのかさ)を置き、兵員を配した。また外国使臣の接待のために鴻臚館があつた。鎌倉時代まで続いたが、武家政治に移り、鎮西奉行が封しく設けられたので、その機能は全くとざされ、ついに廢絶した。大宰府に關する一、萬葉集をら二、三枚草してみる。これは天智二年(七三三)に大宰推古であつた大伴旅人が任職を終えて都へ歸る時のものである。

ますらうおと おもえる吾や 水茎の 水城の上に淡のごはむ

(水城のほとりに馬を止めて、遙かに都府樓を、あり返つて、ゆかれ惜んだのである)。

ここに於て 鏡紫や何處の 白雲のたなびく 山の方にしあるらし

(都(大宰府)に歸つて、鏡紫を思ひ、浮かべてなつかしみ、うたつたのである)。

戦時中「海中かば、水つく屍、大君の邊にこそ死なぬみえりみはせじ」の歌が盛んに唄はれ、忠君愛國の思想を培つたが、その作者、大伴家持(やかもち)は旅人の長子である。

都府樓は、いま千年の風雨にさらされた礎石のみが残りつゝ、その北門後に従ふえる大野山の城跡は千三百年の昔、外敵防備のために、水城の大堤防を構築した時に設けられた基肄(きい)城である。都府樓の東北に親母音寺がある。道真の詩に「都府樓はわづかに瓦の色をみる。觀音寺は見せな、が、ただ鐘の聲を聞く」。有名な寺鐘は、いま國室に指定されてゐる。

菅公を祀る大宰府天満宮には社前に「飛龍梅」の名木がある。飛龍梅といふは「こち吹かば」にこたえて、遠く都から飛びきたつて、花を咲かせたと口碑に傳つてゐる。また菅公が謫居中に吉祥天女の化身といわれる淨明尼が、もち米をつくらつたもちを焼いて、菅公に獻じ、菅中に生治上の相手をしと無聊を慰めて、たゞう傳説によつて、境内では名物として、もち焼を賣る店がある。

そのほか山上憶良の「憶良は待統、文武兩帝に奉仕した官途の歌人で萬葉集の歌聖といふ) おくらは、いまはまか、らむ 子雲(ま)くらむ、その 彼(か)の母も吾(あ)を待つらむ、(憶良が大宰府の宴にはべり遅くなつたので、母子を思ひ、退席を急いだ時のもの)

防人の若傳部身誓(わかやまとべのおまろ)の歌に

わが妻は、いたく悲しうレ のむ水に 影(かご)さへ見えり よに忘られ

が、(防人は諸國から大宰府へ送られて九州の邊を守つた兵士にして故郷に帰してゐる妻が、悲しんでゐるだろう。余もまた水にその姿が映する心地を忘れられぬ。早く任期のくるのを待つる遠く思ひがする歌である)。

防人の坂田部首誓(さかたべのおびとまろ)の歌に

真木柱(まけほしら)ほめて造れる殿のごと、いませ母刀自 面(おも)妻はりせ

ず、(任期「一年」といふをすまして古御に歸つてみれば、母は歳とつて安んじてゐると思つたら、新御をつつてその面立ちを出奔する時と、ちつとも妻つておらず、元氣な姿に喜んだ時の歌である)。

愛宕宮

天満宮の東に接して九二種四面、本造建流造にして半瓦葺屋根の一小祠が、あつたが、昭和三十年十月廿五日、破壊したので取毀した。その際横八種、縦十五種の扁額があり、表面に「愛宕宮 金毘羅宮 隆義 謹上 〇」。裏面には、「慶應三歳在丁卯仲冬、顧時勢、揮書以納之 藩士 近藤隆義敬白」。慶應三年は徳川将軍家茂が死して、慶喜(よしのぶ)が幕を結んだ翌年であり、また朝廷では孝明天皇が崩去して、明治天皇が踐祚になつた年である。この年に大政奉還にのみきつたが、朝廷と幕府との対立は容易に収まらず、武力による不安状態が続けられたので、平和祈願のために、藩主板倉氏が勸請したことが窺はれる。

愛宕神社の奉社は山城、國葛野郡愛宕山に鎮座する宮に似て、この方聖を祭つたものと推察する。(この社は昔は愛宕(またご)権現といふ。その縁起によると、大空年間(七〇七-七三三)に役(小角(おづ))が嵯峨の山奥に至つて美澄といふものと共に、清瀧といふ所へいた處、儼女に土雷雨となり、二人とも逢ふことが出来なかつたので、秘密の呪文を誦すると、雲は悉く晴れて、大杉の枝の上には数万の天狗が現れた。そのなかに白髪蓬々と面を覆ひ、頭上には角があり、眼老のするどい、魔王が「われは三千年

前の昔、靈山において佛の庇護を受け、大魔王となつて、当山を鎮し、群生を利益するものなり」と語つて悉く白雲とむに消え去つたという。怪異の説を書きつゝ、次にやく彼の小角と、越の崇澄とが同墓と傳へてゐる。其後老仁天皇の應元年中(七八一)「天徳の諷りか」大安寺の僧、慶俊僧都が中興し、和氣清庵が寺院を建てて白雲寺と稱し、本尊に勝軍地蔵尊を祭つた。兩来武運長久の神として武家の間に崇敬するようになった。また火の要心の神ともいわれている。権現という言葉は「金光明最勝王經」に「在尊の金剛体は権に化身を現す云々」とあつて、本地垂迹説によつて、佛が衆生を濟度(せんど)と読み人の煩惱を救ひ、極樂浄土の彼岸に渡す、という佛敎の語である。せんがために化身して、この世に化現したといふのである。権現となへられたものは、愛宕権現、金尾四権現、能野権現、富土権現、倫伽権現、藏王権現、山王七社権現、湯殿権現などあつて、いづれも神道と佛敎の合習の社で、信伴の對照である。御幸は不明瞭なのである。従つて假空想像敎のものもある。大概は前にも述べた縁起書のように、深山高峻を北見景として怪異な靈験がもととなつて傳へられているものが多い。それが宗敎的傳統の流れとして明治になり、禁止されて今も神社を寺院な、いづれかに定めなければならぬので、系統の正し、靈神を新たに祀つて神号を賜つたのである。因に愛宕神社は現在伊弉册命と産靈命、雷神、魂元神を祀るといふ。

鐘樓堂

下部の基低は方四五四種にして、創立は詳かでない。明治廿四年の大火の際、その難を免れたが、束倒、庫裏に接した柱二本に焼損の跡が認められる。建物の修理は明治廿七年、本堂再建の時に施された。其の後、基礎台石の修理は昭和三年に行はれたものである。石がきの銘に「昭和三年十一月鐘樓堂大修繕 施主 太田 収、太田 稔 現住靈峰 代」と刻んである。(太田収は茅葺人物造参照) 梵鐘は大東亞戰の酣な昭和十七年頃供出して、いまはなし。鐘銘に元禄十五年云々の文字が彫り込んであつたという。板倉初代の藩主重高が再興の時、寄進したものと思はれる。これにおつて考へれば、創建も同年代にして、敎度の修復が施されたことは言を俟つまでもない。

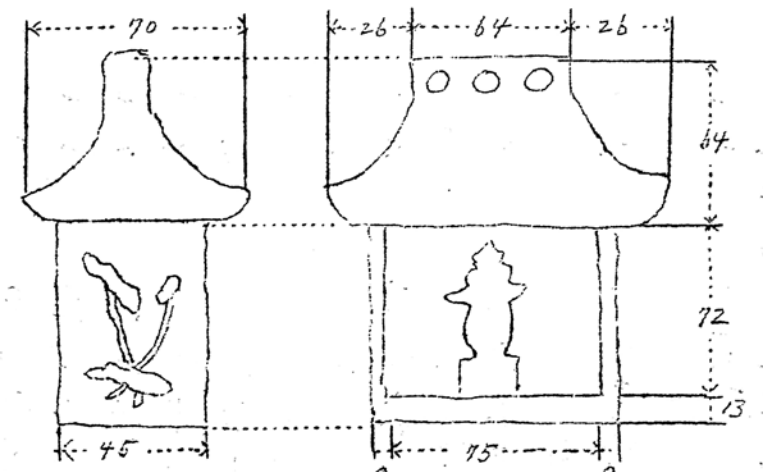
歴代の住取

- 一 前任 本山 珠山 和尙 大禪師 天明の頃々 (過去帳による、墓標なし)
- 二 前任 本山 心叟 和尙 禪師 大永の頃々 同 右
- 三 前任 本山 猷叟 和尙 禪師 慶長の頃々 同 右
- 四 中興 永傳 首座 禪師 明曆單首中叟、伽藍塔の墓石あり、寛永の頃々、栗坂より延福郡手野邑に移す、草庵という。

- 五 前任 本山 以伯 和尙 禪師 延宝の頃々 (過去帳による、墓標なし)
- 六 前任 本山 大隨 首座 禪師 元禄五年寂(月日なし) 墓石あり
- 七 前任 本山 定室 和尙 禪師 元禄の初期か (過去帳による、墓標なし)
- 八 高峯寺 示寂年月なし、元禄十五年、延福寺宿村に移す(有墓)
- 九 前任 本山 月洲 團 禪師 正徳の頃々、示寂不詳 墓石あり
- 一〇 本山 再中興 叟山 顯 禪師 宝曆九己卯正月廿五日、京都に示寂、墓石あり
- 一一 前任 本山 月枝 珊 禪師 安永四己未十二月十二日 寂 同 右
- 一二 前任 本山 矩山 準 禪師 宝曆十四甲申二月十八日 寂 同 右
- 一三 前任 本山 実岩 眞 禪師 寛政二庚戌歲五月十八日 寂 同 右
- 一四 前任 本山 昇山 周 禪師 文政三庚辰八月十五日 寂 同 右
- 一五 前任 本山 明泉 哲 禪師 天保四癸巳歲二月十日 寂 同 右
- 一六 前任 本山 叟山 進 和尙 禪師 明治十二年己卯十一月十日 寂 同 右
- 一七 前任 本山 寂庵 敬 和尙 大禪師 明治廿三年庚辰正月廿五日 寂 同 右
- 一八 寂庵は上足守村に族有松銀太人の四男、天保六己丑生、六十六才死
- 一九 再住 東福 本山 中興 維門 拓 大和尙 文正十二年二月十五日 寂、七十三才

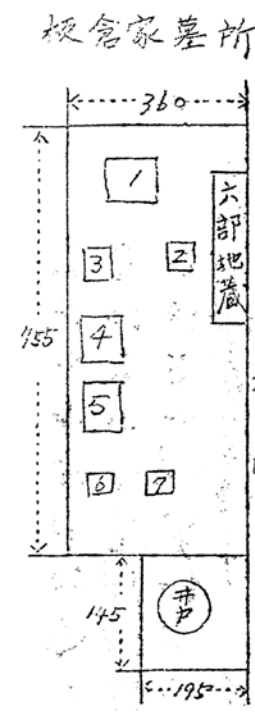
維門は右島県沼隈郡鞆津、田傳七、西男、嘉永四己酉生、明治廿年八月十日有松寂庵の養子となる。再住 東福 本山 靈峰 南 和尙 大禪師 昭和三年十月廿四日 寂、七十八才、姓は高橋氏、後有松信子と成る。昭和十八年、信子、靈岳に譲り、隠居す。

二〇 靈岳 現住 姓は高橋 寛 墓地にある永傳禪師の墓碑は大なる伽藍塔婆にして寸法は左の如し。

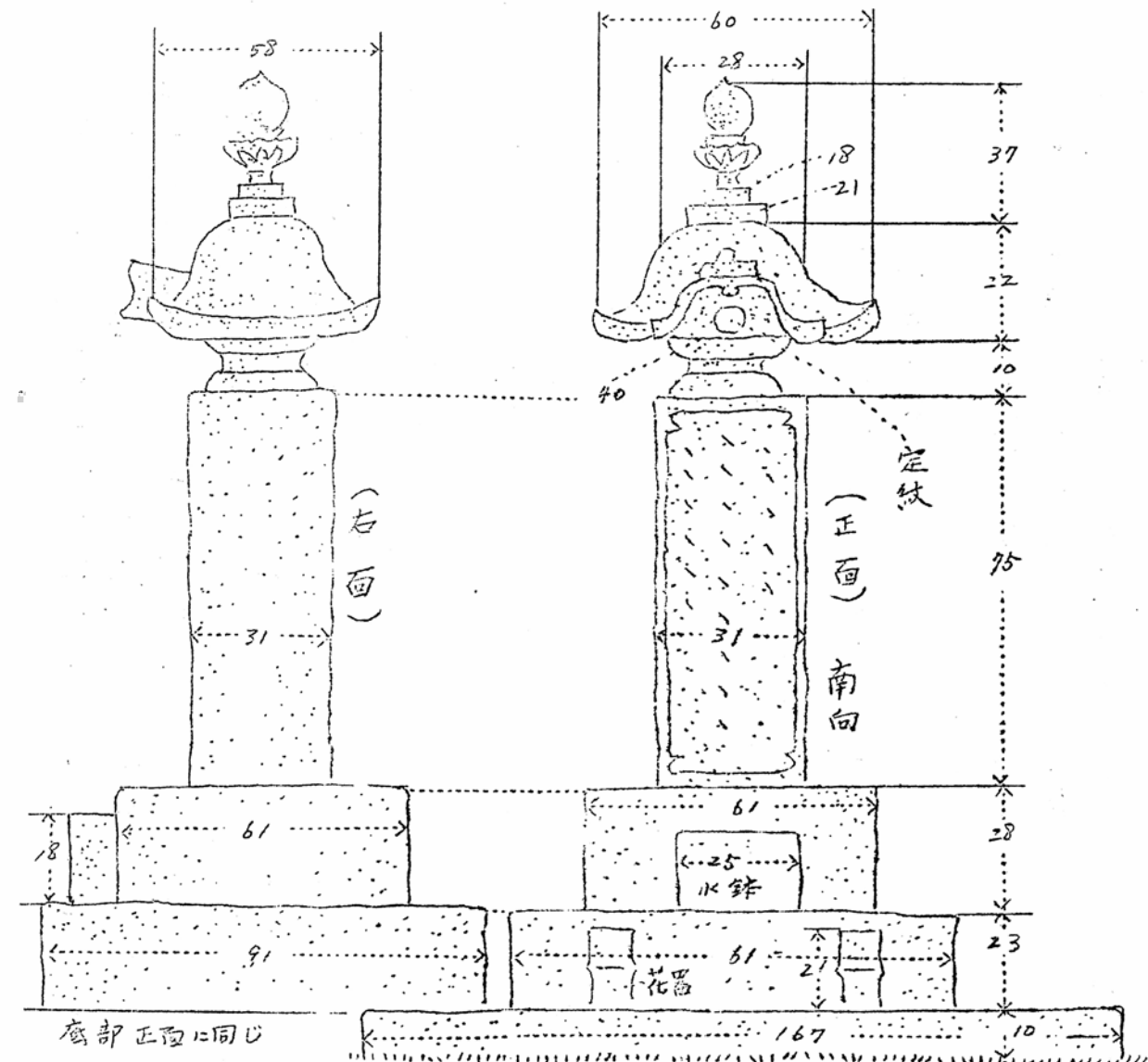


内部中央に五輪塔婆を浮彫して「中興永傳首座禪師」とあり。前面の両縁には右に「明曆戊戌四徳」、左には「参月中旬」とあり。両側の外面には蓮華の模様を浮彫している。ちと石の両側が扉があつたが、今はない。明曆四年（一六五八）即ち万治元年に於て、庭瀬藩主戸川玄蕃安宣の在代である。棟の裏と表には三個宛の紋様を附している。中央は卍（まんじ）とよみ、萬の梵字にして佛の胸前にあつて、吉祥萬徳の相（さう）にして、その左右に五、三の桐の浮彫である。

○墓地
 牽狸の西に接して墓地がある。入り口に高さ六、四の石蔵尊が建てられてゐる。俗にこれを六地藏という。一つは香炉、二つは合掌、三つは錫杖、五つは草管、六つは念珠をもつた地藏尊である。（これは人間が、この世を去る者各自の墓所へ行くまでに諸佛に對して供養させよ、功德を積めよ、と教へられてゐるのである。これに背くものは容易に災禍は出来ないと道き悟されてゐるのである。）（供養（くよう）とは何んであるかといへば、それは行を供と説き、財を養ふといふのである。功德（くどく）とは善行の恵みをなく他に施すことである。）
 この六地藏尊の傍に、庭瀬藩主松倉氏の一族の墓碑が七基ある。いづれも笠石を載せ、左廻り三ツ巴の定紋を表面にあつてゐる。



- 一、聖徳院殿英貌源様大居士
 安永二癸巳歳十月二十三日
 （勝興の三男、勝記、慶次郎）廿五才にて歿した。
- 二、桂華院殿玉光大童
 明治三庚午年八月廿四日
 （土代勝弘の子）
- 三、幻老院殿秋露玉露大
 童女
 慶應癸酉年秋八月廿
 四日
- 四、周徳院殿仁翁良運大
 居士
 明治元成辰歳十月初六
 日卒
- 五、盛徳院殿大法玄機居士
 天保二年歳次壬戌春二月
 初七日卒、寿四十有五
 淡川猿之進勝虎墓
 （位牌には二月八日とあり、勝喜の十
 二子にして、淡川姓を曰す）
 （明治二年侍帳に淡川忠之助、御近
 習、給人百石とあり、忠之助は勝



石を置き、地上高さ一九七程である。寸法形状は左の如し。

- 一、勝弘の子
- 二、桂華院殿玉光大童
 明治三庚午年八月廿四日
 （土代勝弘の子）
- 三、幻老院殿秋露玉露大
 童女
 慶應癸酉年秋八月廿
 四日
- 四、周徳院殿仁翁良運大
 居士
 明治元成辰歳十月初六
 日卒
- 五、盛徳院殿大法玄機居士
 天保二年歳次壬戌春二月
 初七日卒、寿四十有五
 淡川猿之進勝虎墓
 （位牌には二月八日とあり、勝喜の十
 二子にして、淡川姓を曰す）
 （明治二年侍帳に淡川忠之助、御近
 習、給人百石とあり、忠之助は勝

虎の子である。恵土助は幼名にして、敬也進といひ、その夫妻と勝虎の母の初之進の墓碑は当寺の無縁墓のなみにある。

- (一) 盛久院 謙質 静塔居士 明治三十九年十二月四日卒 澁川敬也進 (過去帳には十月十九日あり)
- 法雲院 貞室 智静大姉 正七年三月廿一日歿 (過去帳には三月廿一日あり)
- 盛顔院 英賢 宗雄居士 文久二年七月十二日卒 澁川初之進 源勝侶
- 春彩院 殿霞 山幻 龍童子 宝曆三(以下不明) 正月廿五日

七 明德院 殿 幻化 智老 童子 神儀 享保九甲辰歲七月廿七日 (過去帳には五月十六日あり)

○ 当寺は在瀬藩主 板倉家の祈願寺にして藩主の墓石はない。歴代の墓石は李國、三河の回にある菩提抄長田寺に埋葬したのである。

(長田寺は山号を万燈山といひ、老尊は十二面觀世音菩薩を安置する曹洞宗である。この寺傳は板倉家の遠祖 足利宗氏 の次男、涼義親の念持佛にして、もと中島山永安寺に安置せられたが、慶長年中に長谷川伊賀守勝重が此講長勝禪師を同祖として現地に再興せしめた。勝重の死後、七子を経て寛永七年に勝重の法胤をとつて長田寺に改めた。以後代々この寺を以て板倉五家(安中、松山(高梁) 庭瀬、福島、深溝)の菩提寺に定め、堂上塔の完備に盡した。万燈山は標高六三米、三河平野の西部に位し、一眸に三河平野、三河湾を望み、遠く知多半島を遙指し、景勝の淨地である。

山頂には七胡音を安置し、千人塚と名の霊と斥ふ「かぎ万燈」。羅漢藏には石佛廿二俵。勝重を祀る拜堂などがある。内部には勝重の陶坐像を安置してゐる。その外、重宗、重卿、重昌、重矩の靈廟と、松山、安中、庭瀬、福島、深溝の各校倉家の靈廟がある。

この「かぎ万燈」と云ふは、無形文化財に指定せられる有名な祭典にして、凡そ七百年の昔、この山頂の千人塚に燈火を提げ、その霊を斥ふ盆行事である。長田寺の寺誌によれば「山を万燈山と号す。その由未は、山頂に古塚あり。戦國の時、あまた義を果し、節に死する者を埋む。其の

右、七月中元万燈を焚き、その霊を祭る所以なり云々」とあり、当日は高さ一丈ばかり(約三米)薪を積み重ねたるものを、百八つ煩悩の数になぞらへて、山の西向きに「かぎの形」にならべて、夜九時頃から一宵に亘り焚き上げるのである。昔々古川村の若者たちは万燈組と決めぬいた。揃の法被を着て、松葉集レカサカサは勇しく、金山にこだまレ、火燃はかぎ形に海と化すのである。その壯観は言語に絶する。その火付け、よレあレによつて今年万燈作を占うといはれらる。

当寺の宝物を参考として列挙すると

- 勝重肖像 一幅 探幽筆 (原文化財)
- 勝重 陶像 一軀 肖影堂内 (原文化財)
- 額 一面「長内寺」大東日雲禪師筆
- 額 一面「肖影堂」石川犬山筆
- 勝重樂隊像 一幅 探幽筆 (狩野派)
- 涅槃像 大幅 永信筆
- 重宗肖像 一幅 沢庵、江月、清山、法具
- 松花堂三幅対 探幽筆 (僧)
- 釈迦三尊佛三幅対 必殿司筆 (東福寺)
- 十六善神 一幅 直徳筆
- 金屏風 一双、祇園祭礼之圖、又兵衛筆
- 瀧見觀音三幅対 直徳筆
- 隠元書三幅 (隠元禪師は明國の人、崇禎宗の同祖)
- おしえう集二卷 石川犬山直筆詩集
- 明版大藏經 九〇五五卷
- 信玄公(武田)水呑一個
- 支那古代七宝茶碗二個
- 板倉家歴代画像十四幅 以上拾八點

高級于麵 御土の名産(赤木製麵所) 吉備の桜 都窪郡吉備町・電吉備局一七二

計量器・金物・左官・材料一式 吉備建杖 吉備町 瀬

モ一サンでお馴染み 代表社員平松哲男 電二三七(吉備)